今昔百鬼拾遺

百鬼拾遺序

画師石燕は隠老なり。性質温雅にして、庭に一簣の功を成し、池に九仞の泉を引て、春紅流し、冬雪関々を群す。四時此の楽事に耽て、晛睨を聞き、夏涼沂楽を張る。秋水荻花を同好の者至れば、欣然として茶を烹じ、勉然と老の将に至らんとするを知らざるなり。惟余図を成すに足る。奕々玄勝、以て賞すべし。して画を談ず。既に筆を下すと、直ちに百皆な世の知る所なり。丙申の春百鬼夜行を著す。此に由て弟子益々衆し。成編も且つ多し。今玆に辛丑の春、書肆某又来て幽冥の図を請己亥の歳、後編継ぎ出して、前後百鬼全しふ。而して以て之を刻んと欲す。隠老笑つて曰く、多く之を図す。則ち啻に心力を損ずるのみならずして、譏りを千載に取る。但だ恐は鬼哭さん。夫れ之を何如、と。書肆曰く、画工は元と是れ無類の心を尽す。有道の器に合す。若し夫れ粟を雨し鬼哭するも、亦骨力の至る所にして、尚を佳事なり。強て請ふて、辞すること莫れ、と。是に於て已むこと無し、怪を探り妖を聚めて三巻と為す。百鬼拾遺と題す。序を余に問ふ。余不才を以て辞す。隠老の曰く、負俗の図嬰児の戯と為すのみ、と。不才にして且つ序を作す。則ち是れ一怪事なり。因て固陋を妄（忘）れて其の端に書す。

安永十辛丑春　元洲　滕武幹

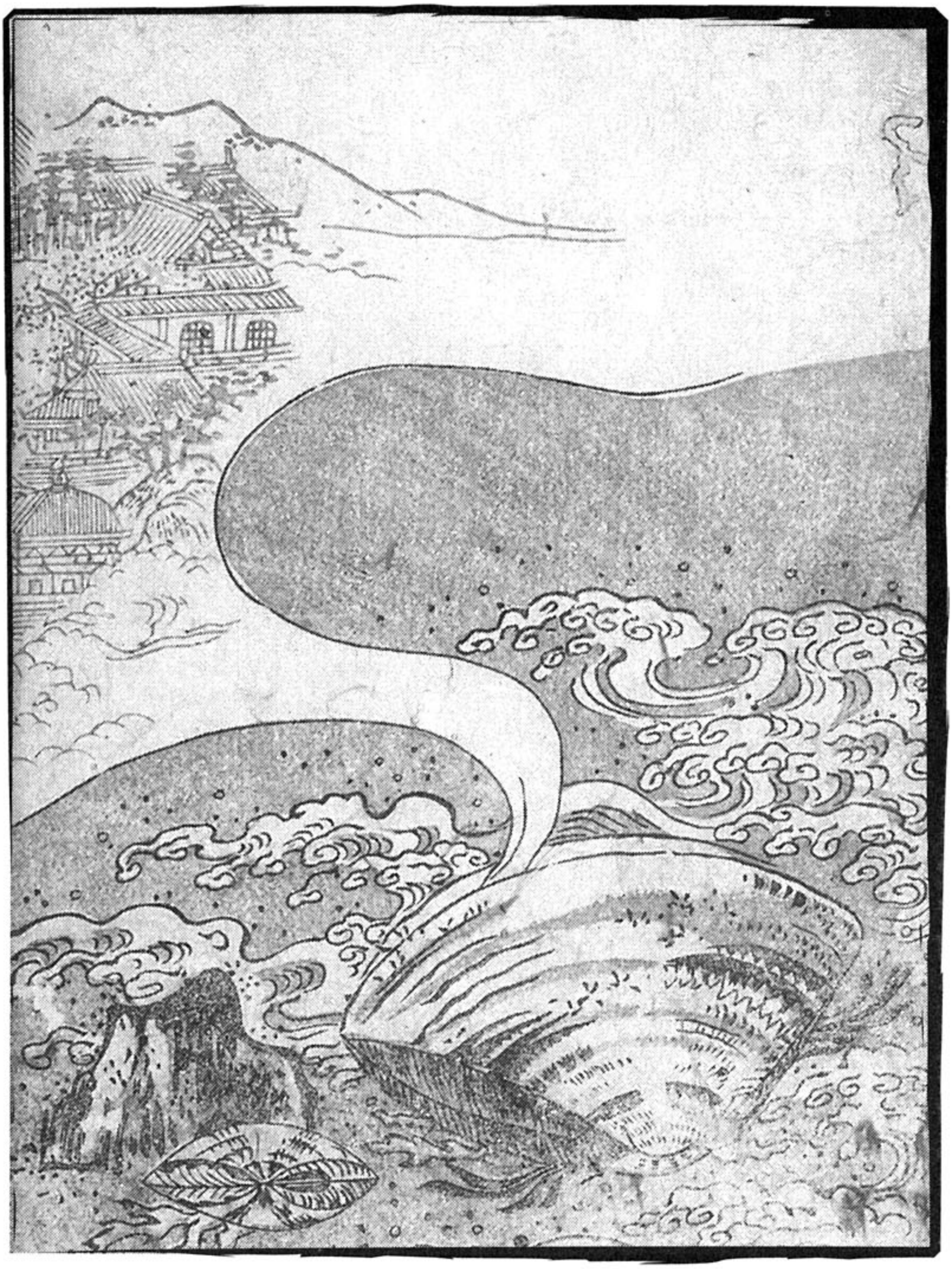
和歌はあめつちをうごかし、是は目に見へぬ鬼がみを絵空ごとに筆もて行まゝ、あやしうもの狂はしきさま、としごとにゑがくは、おぼろげならぬ世々の史林にもはづかはしく、ひめこめ侍るを、書肆某いへる、嬰児のむつかるを止んはしかよりはなし。しきりに乞にまかせぬれば、松たつ春の勇ましきにあたひをまちて、估めや〳〵とやら、桜木にのする事とはなりぬ

安永九のとし蠟月　石燕自序

雲

- 蜃気楼
- 燭陰
- 人面樹
- 人魚
- 返魂香
- 彭侯
- 天狗礫
- 道成寺鐘
- 燈台鬼
- 泥田坊
- 古庫裏婆
- 白粉婆
- 蛇骨婆
- 影女
- 倩兮女
- 煙々羅







蜃気楼

名づく。又海市とも云。

史記の天官書にいはく、海旁蜃気は楼台に象ると云々。蜃とは大蛤なり。海上に気をふきて、楼閣城市のかたちをなす。これを蜃気楼と



燭陰

山海経に曰、鍾山の神を燭陰といふ。身のたけ千里、そのかたち人面龍身にして赤色なりと。鍾山は北海の地なり。



人面樹（にんめんじゅ）

山谷（さんこく）にあり。その花（はな）人の首（くび）のごとし。ものいはずしてたゞ笑（わら）ふ事しきりなり。しきりにわらへば、そのまゝ落花（らくくは）すといふ。



人魚（にんぎょ）

建木（けんぼく）の西にあり。人面（にんめん）にして魚身（ぎょしん）、足（あし）なし。胸（むね）より上（うへ）は人にして下は魚（うお）に似（に）たり。是氐人国（これていじんこく）の人なりとも云。



返魂香（はんごんこう）

漢武帝李夫人を寵愛し給ひしに、夫人みまがり給ひしかば、思念してやまず、方士に命じて返魂香をたかしむ。夫人のすがた髣髴として烟の中にあらはる。武帝ますますかなしみ詩をつくり給ふ。

是耶非耶立而望之 偏娜々何冉々其来遅



彭侯

千歳の木には精あり。状黒狗のごとし。尾なし。面人に似たり。又山彭とは別なり。



天狗礫

凡 深山幽谷の中にて一陣の魔風おこり、山鳴、谷こたへて、大石をとばす事あり。是を天狗礫と云。左伝に見えたる宋におつる七つの石もうたがふらくは是ならんかし。



道成寺鐘

真那古の庄司が娘、道成寺にいたり、安珍がつり鐘の中にかくれ居たるをしりて蛇となり、その鐘をまとふ。この鐘とけて湯となるといふ。

或曰道成寺のかねは今京都妙満寺にあり。その銘左のごとし／紀州日高郡矢田庄文武天皇勅願所道成寺治鐘勧進比丘別当法眼定秀檀那源万寿丸并吉田源頼秀合山諸檀越男女大工山願道願小工大夫守長延暦十四年乙亥三月十一日



燈台鬼

軽大臣遣唐使たりし時、唐人大臣に唖になる薬をのませ身を彩り頭に燈台をいたゞかしめて燈台鬼と名づく。その子弼宰相入唐して父をたづぬ。燈台鬼涙をながし指をかみ切り血を以て詩を書して曰、我元日本華京客汝是一家同姓人為レ子為レ爺前世契隔レ山隔レ海変生辛経レ年流レ涙逢蒿宿逐レ日馳レ思蘭菊親形破二他郷一作二燈鬼一争皈二旧里一寄二斯身一



泥田坊

むかし北国に翁あり。子孫のためにいさゝかの田地をかひ置て、寒暑風雨をさけず時々の耕作おこたらざりしに、この翁死してよりその子酒にふけりて農業を事とせず。はてにはこの田地を他人にうりあたへければ、夜な夜な目の一つあるくろきものいでゝ、田かへせかへせとのゝしりけり。これを泥田坊といふとぞ。



古庫裏婆

僧の妻を梵嫂といへるよし、輟耕録に見えたり。ある山寺に七代以前の住持の愛せし梵嫂その寺の庫裏にすみゐて、檀越の米銭をかすめ、新死の屍の皮をはぎて餌食とせしとぞ。三途河の奪衣婆よりもおそろしおそろし。



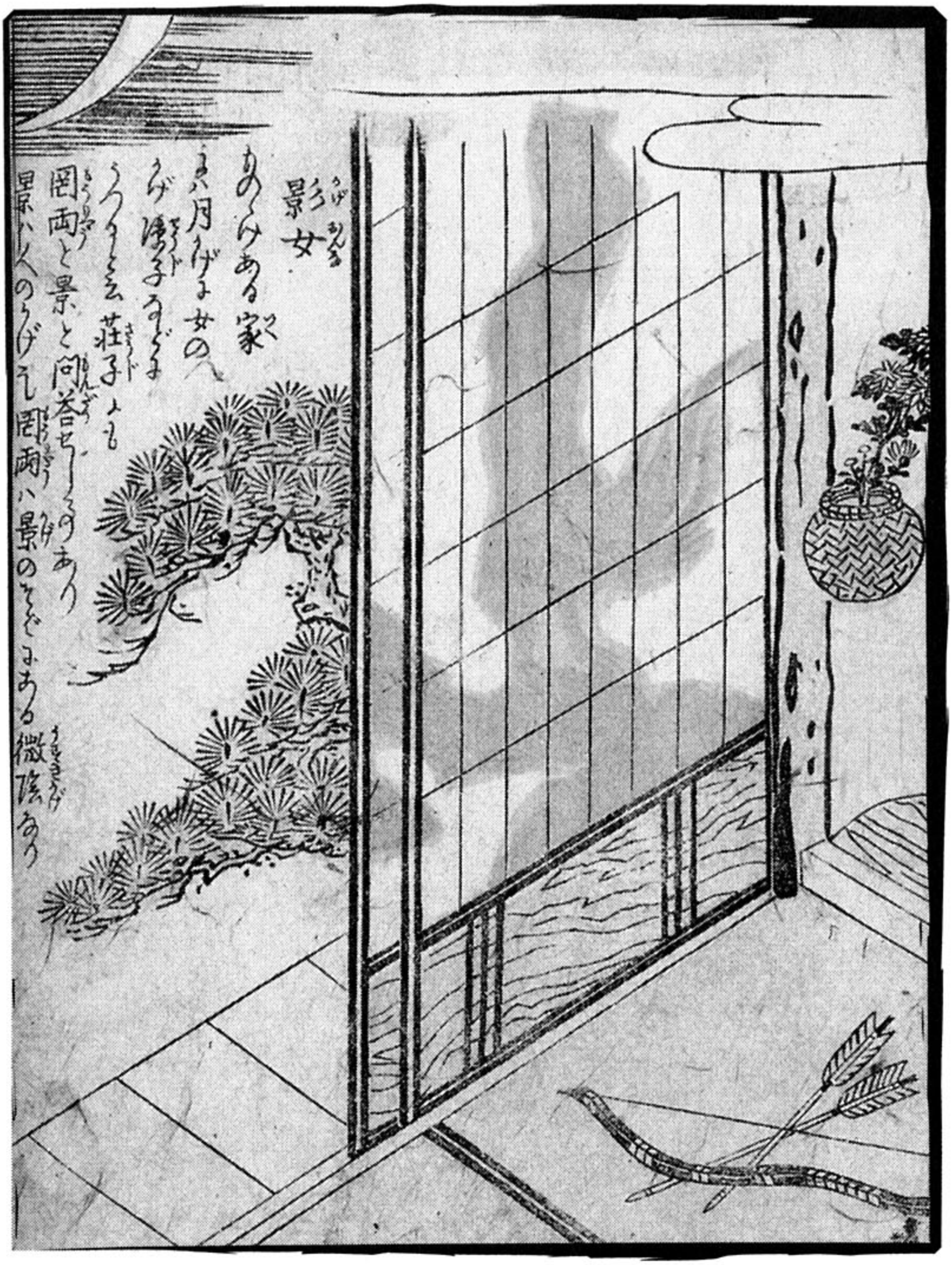
白粉婆（おしろいばば）

紅（べに）おしろいの神（かみ）を脂粉仙娘（じふんせんじやう）と云。おしろいばゝは此神の侍女（じぢよ）なるべし。おそろしきもの、しはすの月夜（つきよ）女のけはひとむかしよりいへり。



蛇骨婆

もろこし巫咸国は女丑の北にあり。右の手に青蛇をとり、左の手に赤蛇をとる人すめるとぞ。蛇骨婆は此の国の人か。或説に云、蛇塚の蛇五右衛門といへるものゝ妻なり。よりて蛇五婆とよびしを、訛りて蛇骨婆といふと。未詳。



影女（かげおんな）

ものゝけある家には月かげに女のかげ障子（せうじ）などにうつると云。荘子（さうじ）にも罔両（もうりやう）と景と問答（もんだう）せし事あり。景は人のかげ也。罔両（もうりやう）は景（かげ）のそばにある微陰（うすきかげ）なり。



倩兮女

楚の国宋玉が東隣に美女あり。墻にのぼりて宋玉をうかゞふ。嫣然として一たび笑へば、陽城の人を惑せしとぞ。およそ美色の人情をとらかす事、古今にためし多し。けらけら女も朱唇をひるがへして、多くの人をまどはせし淫婦の霊ならんか。



煙々羅（えんえんら）

しづが家（や）のいぶせき蚊遣（かやり）の煙（けぶり）むすぼゝれて、あやしきかたちをなせり。まことに羅（うすもの）の風にやぶれやすきがごとくなるすがたなれば、烟々羅（えんえんら）とは名づけたらん。

霧

- 紅葉狩
- 朧車
- 火前坊
- 簑火
- 雨女
- 青行燈
- 小雨坊
- 岸涯小僧
- あやかし
- 鬼童
- 鬼一口
- 蛇帯
- 小袖の手
- 機尋
- 大座頭
- 大間蟲入道
- 殺生石
- 風狸
- 茂林寺釜





紅葉狩（もみじがり）

余五将軍惟茂（よごしやうぐんこれもち）、紅葉（もみぢ）がりの時山中にて鬼女（きぢよ）にあひし事、謡曲（ようきよく）にも見へて皆人のしる所なれば、こゝに贅（ぜい）せず。



朧車（おぼろぐるま）

むかし賀茂（かも）の大路（おほぢ）をおぼろ夜（よ）に車（くるま）のきしる音（おと）しけり。
出（いで）てみれば異形（いぎやう）のもの也。車争（くるまあらそひ）の遺恨（いこん）にや。



火前坊

鳥部山の烟たちのぼりて、龍門原上に骨をうづまんとする三昧の地よりあやしき形の出たれば、くはぜん坊とは名付たるならん。



簑火

田舎道などによなよな火のみゆるは多くは狐火なり。この雨にきるたみのゝ嶋とよみし簑より火の出しは陰中の陽気か。又は耕作に苦める百姓の臑の火なるべし。



青行燈（あおあんどう）

燈（ともしび）きえんとして又あきらかに、影憧々（かげどうどう）としてくらき時、青行燈（あをあんどう）といへるものあらはるゝ事ありと云。むかしより百物語をなすものは、青き紙（かみ）にて行燈（あんどう）をはる也。昏夜（こんや）に鬼（き）を談（だん）ずる事なかれ。鬼を談ずれば怪（くはい）いたるといへり。



雨女（あめおんな）

もろこし巫山（ふざん）の神女（しんぢよ）は、朝（あした）には雲（くも）となり、夕（ゆうべ）には雨（あめ）となるとかや。雨女（あめ）もかゝる類（たぐひ）のものなりや。



小雨坊

小雨坊は雨そぼふる夜、大みねかつらぎの山中に徘徊して斎料をこふとなん。



岸涯小僧

岸涯小僧は川辺に居て魚をとりくらふ。
その歯の利き事やすりの如し。



あやかし

西国(さいごく)の海上(かいじやう)に船(ふね)のかゝり居(を)る時、ながきもの船(ふね)をこえて二三日もやまざる事あり。油(あぶら)の出る事おびたゞし。船人(ふなびと)力をきはめて此油をくみほせば害(がい)なし。しからざれば船沈(ふねしづ)む。是あやかしのつきたる也。



鬼童

鬼童丸は雪の中に牛の皮を蒙りて、頼光を市原野にうかゞふと云。



鬼一口（おにひとくち）

在原業平（ありはらのなりひら）二条（にでう）の后（きさき）をぬすみいでゝ、あばら屋にやどれるに、鬼一口（おにひと）にくひけるよし、いせ物がたりに見えたり。

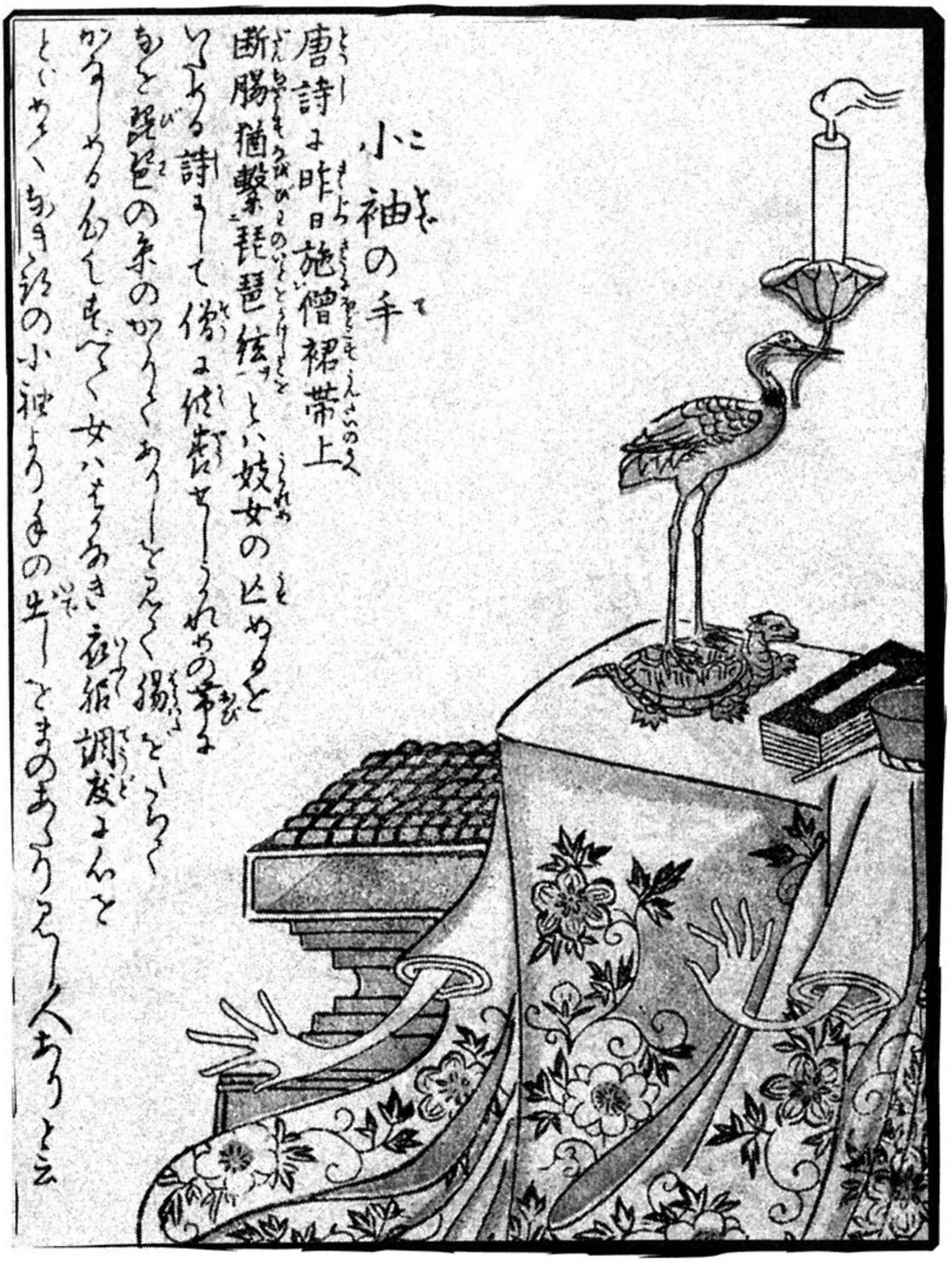
しら玉か何ぞと人のとひし時露とこたへてきえなましものを



蛇帯（じゃたい）

博物志（はくぶつし）に云（いはく）、人帯（ひとおび）を藉（しき）て眠（ねぶ）れば蛇（じゃ）を夢（ゆめ）むと云々。されば妬（ねため）る女の三重（みえ）の帯は、七重（ななえ）にまはる毒（どく）蛇ともなりぬべし。

おもへどもへだつる人やかきならん身はくちなはのいふかひもなし



小袖の手

唐詩に、昨日施レ僧裙帯上断腸猶繫二琵琶絃一とは妓女の亡ぬるをいためる詩にして、僧に供養せしうかれめの帯になを琵琶の糸のかゝりてありしを見て、腸をたちてかなしめる心也。すべて女ははかなき衣服調度に心をとゞめて、なき跡の小袖より手の出しをまのあたり見し人ありと云。



機尋（はたひろ）

はたひろはある女夫（おつと）の出てかへらざるをうらみ、おりかゝれる機（はた）をたちしに、その一念（ねん）はたひろあまりの蛇（じや）となりて夫の行衛（ゆくゑ）をしたひしとぞ。自二君之出一矣不二復理一二殘機一（きみがいでしより また ざんきを おさめず）と唐詩（とうし）にもつくれり。



大座頭

大座頭はやれたる袴を穿、足に木履をつけ、手に杖をつきて、風雨の夜ごとに大道を徘徊す。ある人これに問て曰、いづくんかゆく。答ていはく、いつも倡家に三絃を弄すと。



火間蟲入道

人生勤にあり。つとむる時は匱からずといへり。生て時に益なく、うかりうかりと間をぬすみて一生をおくるものは、死してもその霊ひまむし夜入道となりて、燈の油をねぶり、人の夜作をさまたぐるとなん。今詑りてへマムシとよぶは、へとひと五音相通也。

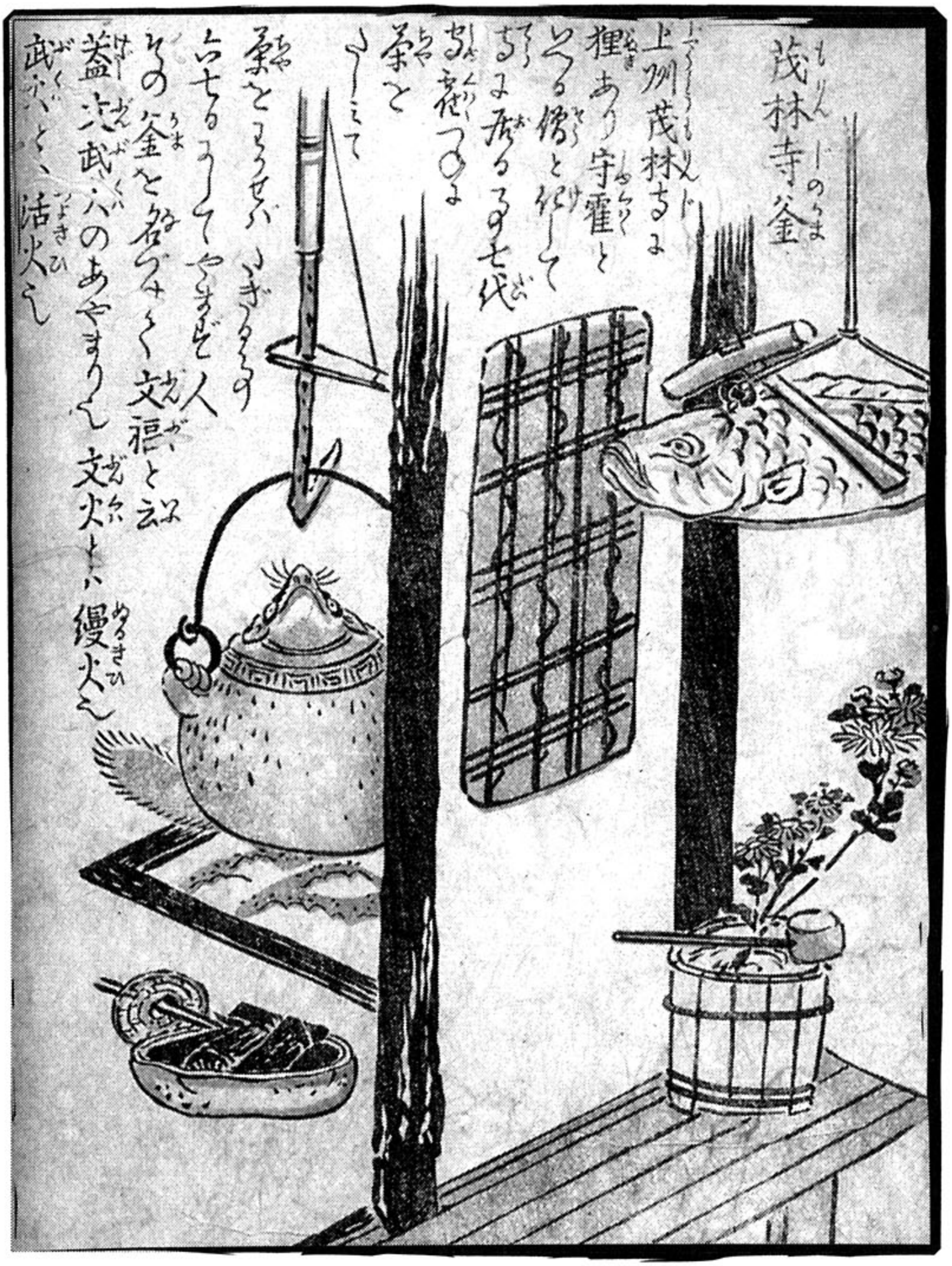


殺生石

殺生石は下野国那須野にあり。老狐の化する所にして、鳥獣これに触れば皆死す。応永二年乙亥正月十一日、源翁和尚これを打破すといふ。

風狸（ふうり）

風により巌（いはほ）をかけり木にのぼり、そのはやき事飛鳥（ひてう）の如（ごと）し。



茂林寺釜

上州茂林寺に狸あり。守霍といへる僧と化して寺に居る事七代、守霍つねに茶をたしみて茶をわかせば、たぎる事六、七日にしてやまず。人のその釜を名づけて文福と云。蓋文武火のあやまり也。文火とは緩火也。武火とは活火也。

雨

- 羅城門鬼（らじょうもんのおに）
- 夜啼石（よなきのいし）
- 芭蕉精（ばしょうのせい）
- 硯の魂（すずりのたましい）
- 屏風闕（びょうぶのぞき）
- 毛羽毛現（けうけげん）
- 目目連（もくもくれん）
- 枉骨（きょうこつ）
- 目競（めくらべ）
- 後神（うしろがみ）
- 否哉（いやや）
- 方相氏（ほうそうし）
- 滝霊王（たきれいおう）
- 白沢（はくたく）
- 隠里（かくれざと）





羅城門鬼

都良香らせうもんを過て一句を吟じて曰、気霽風梳新柳髪と。その時鬼神一句をつぎていはく、氷消波洗旧苔鬚と。後、渡辺綱がために腕をきられ、からきめ見たるもこの鬼神にや。



夜啼石（よなきのいし）

遠州佐夜（えんしうさよ）の中山にあり。むかし孕婦（はらめるおんな）この所にて盗賊（とうぞく）のために害（がい）せられ、子（こ）は胎胞（たいはう）の内に恙（つゝが）なく、幸に生長（さいはゐせいちやう）してその讎（あた）を報（むくひ）しとかや。



芭蕉精（ばしょうのせい）

もろこしにて芭蕉（ばせを）の精（せい）人と化（け）して物語（ものがたり）せしことあり。今の謡物（うたひもの）はこれによりて作（つく）れるとぞ。



硯の魂

ある人赤間が関の石硯をたくはへて文房の一友とす。ひと日平家物語をよみさして、とろとろと居ねふるうち、案頭の硯の海の波さかだちて、源平のたゝかひ今みるごとくあらはれしとかや。もろこし徐玄之が紫石潭も思ひあはせられ侍り。



屏風闚

翠帳紅閨に枕をならべ、顛鸞倒鳳の交あさからず、枝をつらね翼をかはさんとちかひし事も佗となりし胸三寸の恨より、七尺の屏風も猶のぞくべし。

毛羽毛現

毛羽毛現ハ惣身ニ毛生ひたる事毛女のごとくなればかくいふか。或ハ希有希見とかきて、ある事まれに、見る事まれなればなりとぞ。



毛羽毛現

毛羽毛現は惣身に毛生ひたる事毛女のごとくなればかくいふか。或は希有希見とかきて、ある事まれに、見る事まれなればなりとぞ。



目目連

煙霞跡なくして、むかしたれか栖し家のすみずみに目を多くもちしは、碁打のすみし跡ならんか。



狂骨

狂骨は井中の白骨なり。世の諺に甚しき事をきやうこつといふも、このうらみのはなはだしきよりいふならん。



目競（めくらべ）

大政人道清盛（だいぜうにうだうきよもり）ある夜（よ）の夢（ゆめ）に、されかうべ東西（とうざい）より出てはじめは二つありけるが、のちには十、二十、五十、百、千、万、のちにはいく千万といふ数（かず）をしらず。入道もまけずこれをにらみけるに、たとへば人の目くらべをするやう也しよし。平家物語（へいけものがたり）にみえたり。



後神（うしろがみ）

うしろ神は憶病神につきたる神也。前にあるかとすれば、忽焉として後にありて、人のうしろがみをひくといへり。



否哉（いやや）

むかし漢（かん）の東方朔（とうぼうさく）、あやしき虫（むし）をみて怪我（くはいさい）と名づけしためしあり。今この否哉（いやゝ）もこれにならひて名付（あやしいかなづけ）たるなるべし。



方相氏

論語曰、鄉人儺朝服而立二於阼階一
註儺所二以逐一レ疫周礼方相氏掌レ之。



滝霊王

諸国の滝つぼよりあらはるゝと云。青龍疏に、一切の鬼魅諸障を伏すと云々。



白沢（はくたく）

黃帝東巡　白沢一見　避怪除害　靡所不徧
摸捫窩贊



隠里（かくれざと）



百器徒然袋

百器徒然袋序

嘗つて社樹を以て俳諧と為すや、之を遠望すれば峨々として春天を払ひ、就て之を視れば其の根則ち群狐の託する所。此の語に相当するは石燕即ち其の人なり。天台の西に顕れ、古社の下に隠れ、而して万鬼を伏倚し、怪状を図画して世俗を驚駭せしむ。是に由つて遂に以て老狐の名を負ふ。亦た宜からずや。今春復し、亦た此図を請ふ者多し。図せば則ち謝混の俳する所と為り、画せざれば則ち江庵の筆を還すに似たり。嗚呼、之を如何せん。寧ろ我をして身後の名有らしむるは、即時一盃の酒に如かず。是が為に吾の好む所に従ひて、自ら斯の技を楽しむ。此れも一時なり。是に於て智嚢を発き、才器に任す。霊影を採撫し、図以て三巻と為す。百器徒然袋と題す。而して予の序を請ふ。予先に并に序する所、言に於て得ざるは憑婦の如きなり。士為る者の之を笑ふを免れず。今三界に当りて其の可ならざるを知る。而して義に之くに止らず、勢勇の前に在りて序す。

天明四甲辰春　元洲滕武幹

上

- 宝船（たからぶね）
- 塵塚怪王（ちりづかかいおう）
- 文車妖妃（ふぐるまようひ）
- 長冠（おさこうぶり）
- 沓頬（くつつら）
- ばけの皮衣（かわごろも）
- 絹狸（きぬたぬき）
- 古籠火（ころうか）
- 天井嘗（てんじょうなめ）
- 白容裔（しろうねり）
- 骨傘（ほねからかさ）
- 鉦五郎（しょうごろう）
- 払子守（ほっすもり）
- 栄螺鬼（さざえおに）







宝船（たからぶね）

ながき世のとをのねぶりの





塵塚怪王

それ森羅万象およそかたちをなせるものに長たるものなきことなし。麟は獣の長、鳳は禽の長たるよしなれば、このちりづか怪王はちりつもりてなれる山姥とうの長なるべしと、夢のうちにおもひぬ。



文車妖妃

歌に、古しへの文見し人のたまなれやおもへばあかぬ白魚となりけり。かしこき聖のふみに心をとめしさへかくのごとし。ましてや執著のおもひをこめし千束の玉章には、かゝるあやしきかたちをもあらはしぬべしと、夢の中におもひぬ。





長冠（おさこうぶり）

東都の城門にかけて世をのがれし賢人の冠にはあらで、このてがしはのふたおもてありし伜（ねぢけ）人のおもかげならんかしと、夢ごゝろにおもひぬ。



沓頬

鄭瓜州の瓜田に怪ありて、瓜を喰ふ靈隠寺の僧これをきゝて符をあたふ。是を瓜田にかくに、怪ながくいたらず。のち其符をひらき見るに、李下不レ正レ冠の五字ありと。かつてこの怪にやと、夢のうちにおもひぬ。



ばけの皮衣（かわごろも）

三千年を経（へ）たる狐、藻艸（もぐさ）をかぶりて北斗（ほくと）を拝し、美女と化するよし、唐（もろこし）のふみに見へしはこれなめりと、夢のうちにおもひぬ。



絹狸（きぬ　たぬき）

腹（はら）つゞみをうつと言へるより、衣うつなる玉川の玉にゑんある八丈のきぬ狸とは化（ばけ）しにやと、ゆめの中におもひぬ。



古籠火

それ火に陰火、陽火、鬼火さまざまありとぞ。わけて古戦場には汗血のこりて鬼火となり、あやしきかたちをあらはすよしを聞はべれども、いまだ燈籠の火の怪をなすことをきかずと、夢の中におもひぬ。



天井嘗（てんじょうなめ）

天井の高は燈（ともしび）くろうして冬さむしと言へども、これ家さくの故にもあらず。まつたく此怪（くわい）のなすわざにて、ぞつとするなるべしと、夢のうちにおもひぬ。



白容斎（しろうねり）

白うるりは徒然（つれづれ）のならいなるよし。この白うねりはふるき布巾（ふきん）のばけたるものなれども、外にならいもやはべると、夢のうちにおもひぬ。



骨傘（ほねからかさ）

北海（ほくかい）に鴟吻（しふん）と言へる魚あり。かしらは龍のごとく、からだは魚に似（に）て、よく雲をおこし雨をふらすと。このからかさも雨のゑんによりてかゝる形（かたち）をあらはせしにやと、夢のうちにおもひぬ。



鉦五郎（しょうごろう）

金の雞（こがねにはとり）は淀屋（よどや）辰五郎が家のたからなりしよし。此かねも鉦五郎と言へるからは、金にてやありけんと、夢のうちにおもひぬ。



払子守

趙州無の則に、狗子にさへ仏性ありけり。まして伝燈をかゝぐる坐禅の床に、九年が間うちふつたる払子の精は、結加趺坐の相をもあらはすべしと、夢のうちにおもひぬ。



栄螺鬼（さざえおに）

雀海中に入てはまぐりとなり、田鼠化（でんそけ）して鶉（うづら）となるためしもあれば、造化（ぞうくは）のなすところ、さゞえも鬼になるまじきものにもあらずと、夢心におもひぬ。

中

○鎗毛長
○虎隠良
○鞍野郎
○禅釜尚
○鐙口
○松明丸
○不々落々
○貝児
○髪鬼

○角盥漱
○袋貉
○琴古主
○琵琶牧々
○三味長老
○襟立衣
○経凛々
○乳鉢坊
○瓢箪小僧

○木魚達摩
○如意自在
○暮露々々団
○箒神
○蓑草鞋





禅釜尚　茶は閑寂を事とするものから、陰気ありてかゝる怪異もありぬべし。文福茶釜のためしもや、ともに夢の中に思ひぬ。



鎗毛長・虎隠良・禅釜尚

鎗毛長　日本無双の剛の者の手にふれたりし毛鑓にや。怪しみを見てあやしまず。まづ先がけやの手がらをあらはす。／虎隠良　たけき獣の革にて製したるきんちやくゆへにや、そのときこと千里をはしるがごとし。／



鞍野郎

保元の夜軍に鎌田政清手がらをなせしも我ゆへなれば、いかなる恩をもたぶべきに、手がたをつけんと前輪のあたりをきりつけらるれば、気も魂もきへぎへとなりしとおしみて唄ふ声いとおもしろく、夢のうちにおもひぬ。



鐙口（あぶみくち）

膝（ひざ）の口をのぶかにいさせてあぶみを越しておりたゝんとすれども、なんぎの手なればと、おなじくうたふと、夢心におぼへぬ。



松明丸（たいまつまる）

松明の名はあれども、深山幽谷（しんざんゆうこく）の杉の木ずゐをすみかとなせる天狗つぶての石より出る光にやと、夢心におもひぬ。



不々落々（ぶらぶら）

山田もる提灯の火とは見ゆれども、まことは蘭ぎくにかくれすむ狐火なるべしと、ゆめのうちにおもひぬ。



貝児（かいちご）

貝おけ這子など言へるは、やんごとなき御かたの調度にして、しばらくもはなるゝこと無れば、この貝児は這子の兄弟（はらから）にやと、おぼつかなく夢心に思ひぬ。



髪鬼（かみおに）

身体髪膚（しんたいはっぷ）は父はゝの遺躰（いたい）なるを、千すじの落髪（おちがみ）を泥土に汚（けが）したる罪（つみ）に、かゝるくるしみをうくるなりと言ふを、夢ごゝろにおぼへぬ。



角盥漱（つのはんぞう）

なにを種とてうき艸のうかみもやらぬ小野の小町がそうしあらいの執心なるべしと、夢心におもひぬ。



袋貉（ふくろむじな）

穴のむじなの直をするとは、おぼつかなきことのたとへにいへり。袋のうちのむじなも同じことながら、鹿を追ふ猟師のためには、まことに袋のものをさぐるがごとくならんと、夢のうちにおもひぬ。



琴古主（ことふるぬし）

八橋とか言へる瞽（こ）しやのしらべをあらためしより、つくし琴（ごと）は名のみにして、その音いろをきゝ知れる人さへまれなれば、そのうらみをしらせんとてか、かゝる姿をあらはしけんと、夢心におもひぬ。



琵琶牧々（びわぼくぼく）

玄上牧馬（げんぼくば）と言へる琵琶はいにしへの名器にして、ふしぎたびたびありければ、そのぼく馬のびはの転にして、ぼくぼくと言ふにやと、夢のうちにおもひぬ。



三味長老（しやみちようろう）

諺に沙弥（しやみ）から長老（ちやうらう）にはなられずとは、沙弥渇食（かつじき）のいやしきより、国師（こくし）長老の尊（たつとき）にはいたりがたきのたとへなれども、是はこの芸（げひ）にかんのうなる人の此みちの長たるものと用ひられしその人の器（うつは）の精（せい）なるべしと、夢の中に思ひぬ。



襟立衣（えりたてごろも）

彦山（ひこ）の豊前坊（ぶぜんぼう）、白峯（ふう）の相摸坊（さがみ）、大山の伯耆坊、いづなの三郎、富士太郎、その外木の葉天狗まで、羽団扇（はうちは）の風にしたがひなびくくらまの山の僧正坊のゑり立衣なるべしと、夢心におもひぬ。



経凜々（きやうりんりん）

尊ふとき経文のかゝるありさまは、咒咀諸毒薬（じゆそしよどくやく）のかえつてその人に帰せし守敏僧都（しゆびんそうづ）のよみ捨られし経文にやと、夢ごゝろにおもひぬ。



乳鉢坊（にゅうばちぼう）・瓢箪小僧（ひょうたんこぞう）

へうたん小僧に肝（きも）を消して

青ざめたりしが、乳ばち坊の泉ばちのおとに夢さめぬとおもひぬ。



木魚達摩

杖拂木魚客板など、禅床ふだんの仏具なれば、かゝるすがたにもばけぬべし。払子守とおなじきものかと、夢のうちにおもひぬ。



如意自在（にょいじざい）

如意は痒（かゆき）ところをかくに、おのれがおもふところにとゞきて心のごとくなるよりの名なれば、かく爪（つめ）のながきも痒ところへ手のとゞきたるばけやうかなと、夢心に思ひぬ。



暮露々々団（ぼろぼろとん）

普化禅宗（ふけぜんしう）を虚無僧（こむそう）と言ふ。虚無空（むくう）じやくをむねとして、いたるところ薦（こも）むしろに座してもたれりとするゆへ、また薦僧（こもそう）とも言ふよし。職人（しよく）づくし歌合に、暴露（ぼろ）暴露ともよめれば、かの世捨人のきふるせるぼろぶとんにやと、夢の中におもひぬ。



箒神（ははきがみ）

野わけはしたなく吹けるあした、林かんに酒をあたゝむるとて、朝きよめの仕丁のはきあつめぬるはゝきにやと、夢心におもひぬ。



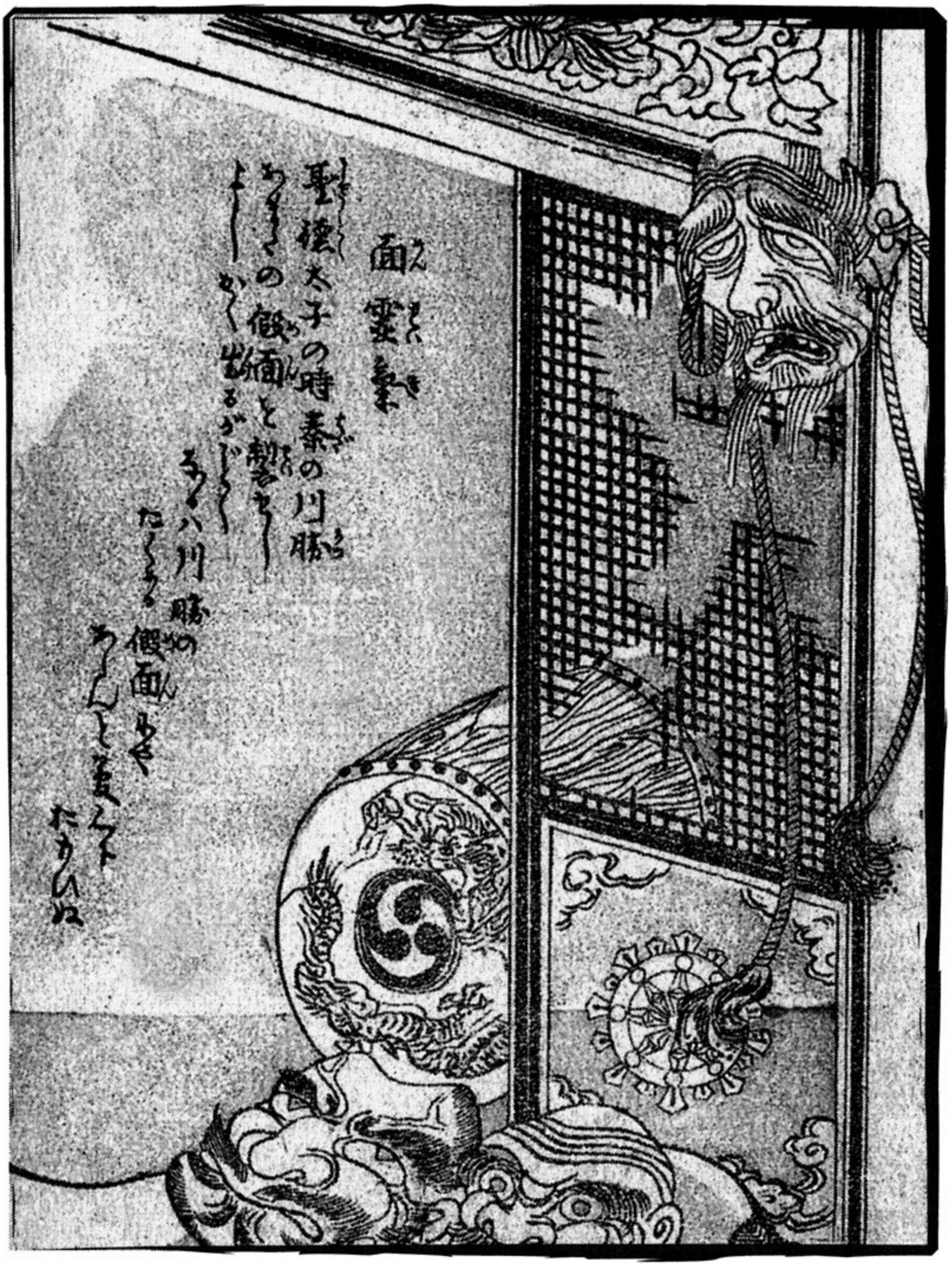
蓑草鞋（みのわらじ）

雪（ゆき）は鵝（が）毛に似て飛でさんらんし、人は鶴裳（くはくしやう）をきてたつて徘徊（はいくはい）せし、そのふる蓑（みの）の妖（やう）くはゐにやと、夢の中におもひぬ。

下

○面霊気（めんれいき）
○幣六（へいろく）
○雲外鏡（うんがいきょう）
○鈴彦姫（すずひこひめ）
○古空穂（ふるうつぼ）
○無垢行騰（むくむかばき）
○猪口暮露（ちょくぼろん）
○瀬戸大将（せとたいしょう）
○五徳猫（ごとくねこ）
○鳴釜（なりがま）
○山颪（やまおろし）
○瓶長（かめおさ）
○宝船（たからぶね）





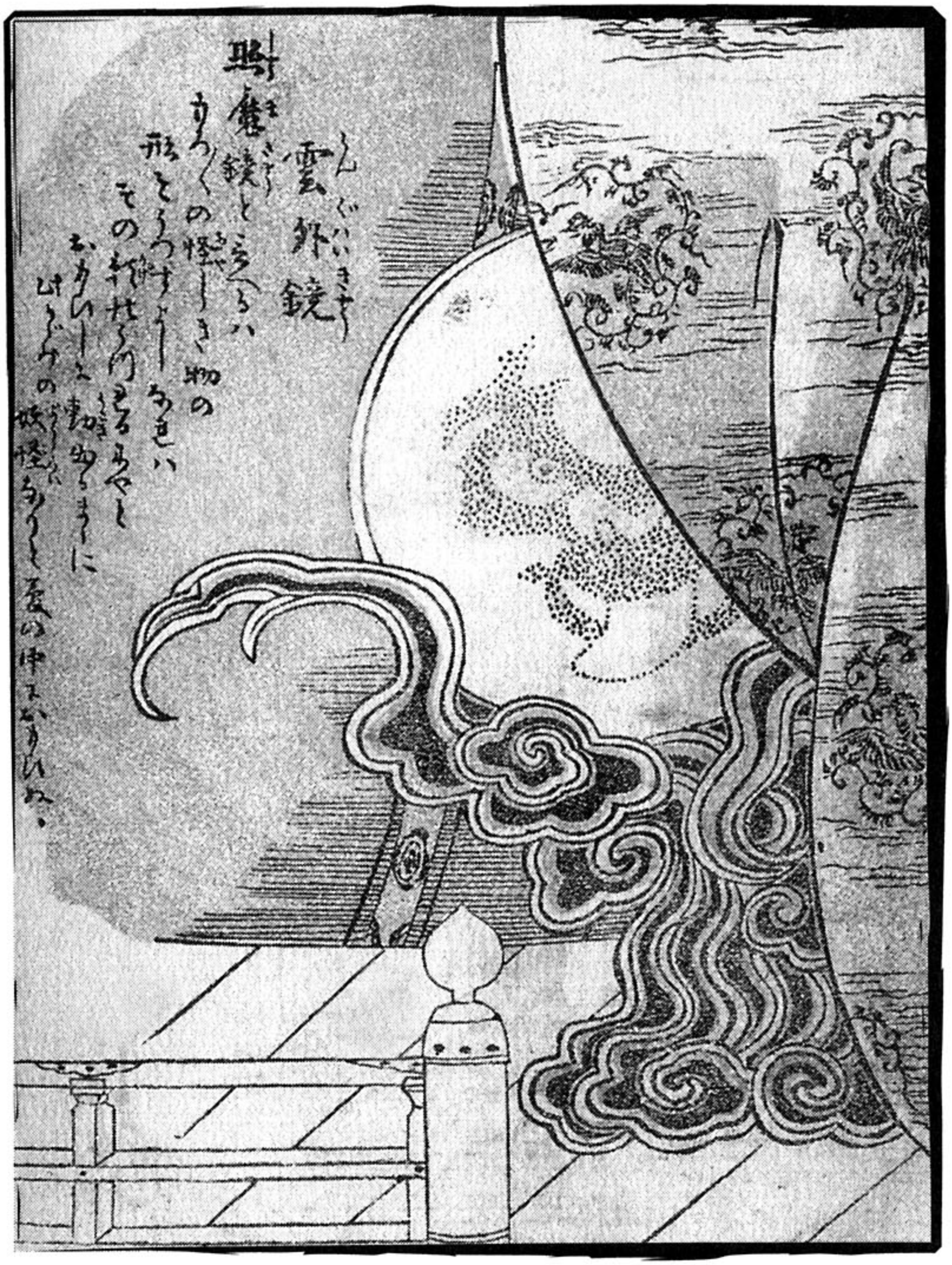
面霊気（めんれいき）

聖徳太子（しょうとく）の時、秦の川勝（はだのかつ）あまたの仮面（めん）を製（せい）せしよし。かく生（いけ）るがごとくなるは、川勝のたくめる仮面（めん）にやあらんと、夢心におもひぬ。



幣六（へいろく）

花のみやこに社（やしろ）さだめず、あらぶるこゝろまします、
神のさわぎ出給ひしにやと、夢心におもひぬ。



雲外鏡（うんがいきよう）

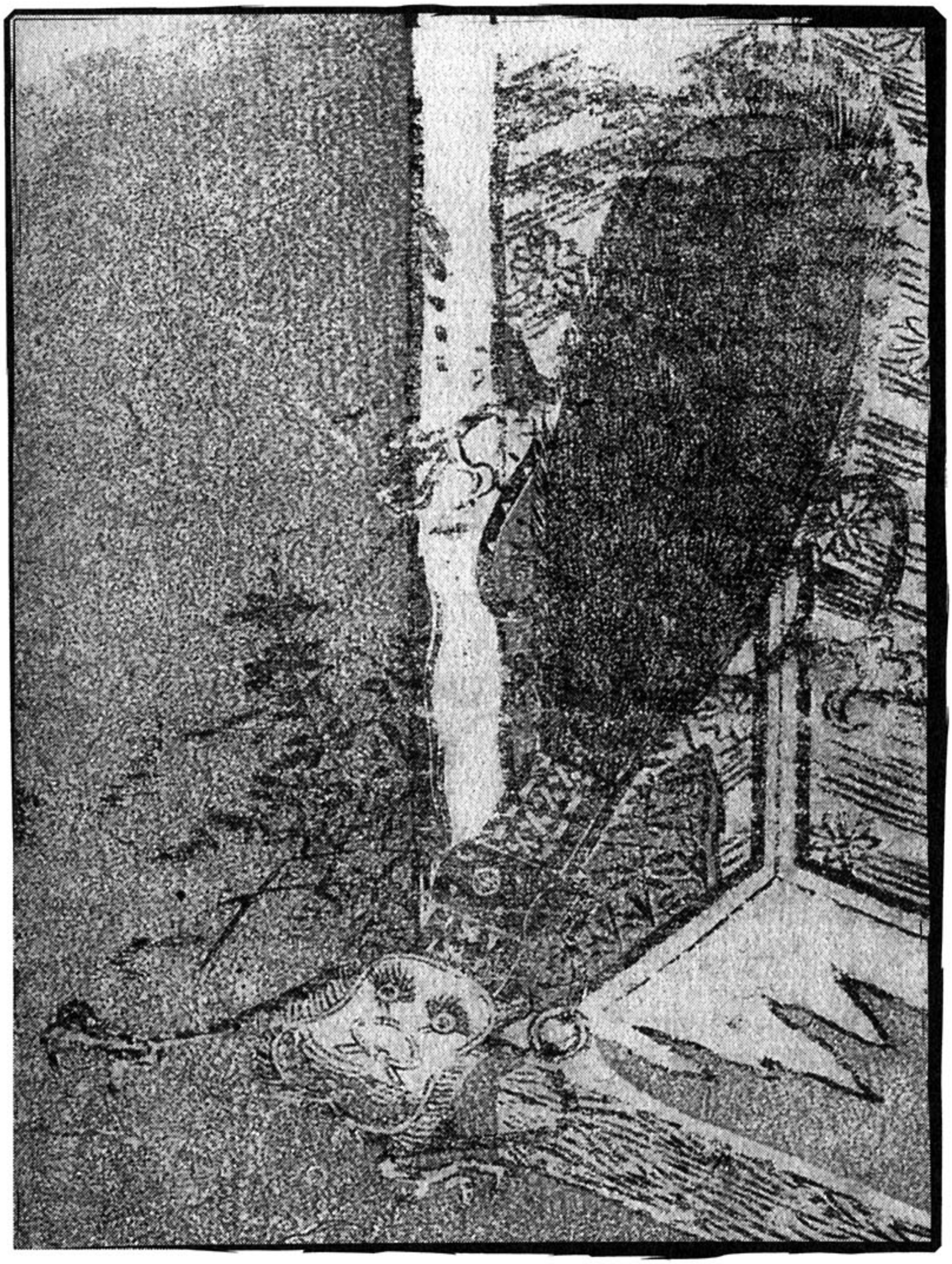
照魔鏡（しやうまきやう）と言へるは、もろもろの怪（あや）しき物の形をうつすよしなれば、その影（かげ）のうつれるにやとおもひしに、動出（うごき）るまゝに、此かゞみの妖怪（ようくはい）なりと、夢の中におもひぬ。



鈴彦姫（すずひこひめ）

かくれし神を出し奉んとて岩戸のまへにて神楽（かぐら）を奏（さう）し給ひし天鈿女（あまのうずめ）のいにしへもこひしく、夢心におもひぬ。

百器徒然袋……二三八



古空穂（ふるうつぼ）



無垢行騰（むくむかばき）

赤沢山（あかさは）の露ときへし河津の三郎が行騰にやと、夢心に思ひぬ。



猪口暮露

明皇あるとき書を見給ふに、御机の上に小童あらはる。明皇叱したまへば、臣はこれ墨の精なりと奏してきへうせけるよし。此怪もその類かと、夢のうちにおもひぬ。



瀬戸大将

夢のうちにおもひぬ。

甕をよこたへて詩を賦せし曹孟徳にからつやきのからきめ見せし燗鍋の寿亭侯にや。蜀江のにしき手を着たりと、



五徳猫（ごとくねこ）

七とくの舞をふたつわすれて、五徳（ごとく）の官者（くは）と言ひしためしもあれば、この猫もいかなることをか忘れけんと、夢の中におもひぬ。



鳴釜（なりがま）

白沢避怪図曰　飯甑作レ声鬼名二敛女一　有二此怪一則
呼二鬼名一　其怪忽　自　滅

夢のうちにおもひぬ。



山颪（やまおろし）

豪猪（がうちよ）といへる獣（けもの）あり。山おやじと言ひて、そう身の毛はりめぐらし、此妖怪（ようくわい）も名とかたちの似たるゆへにかく言ふならんと、夢心におもひぬ。



瓶長（かめおさ）

わざわひは吉事のふくするところと言へば、酌（くめ）どもつきず、飲どもかはらぬめでたきことを、かねて知らする瓶長（かめおさ）にやと、夢のうちにおもひぬ。





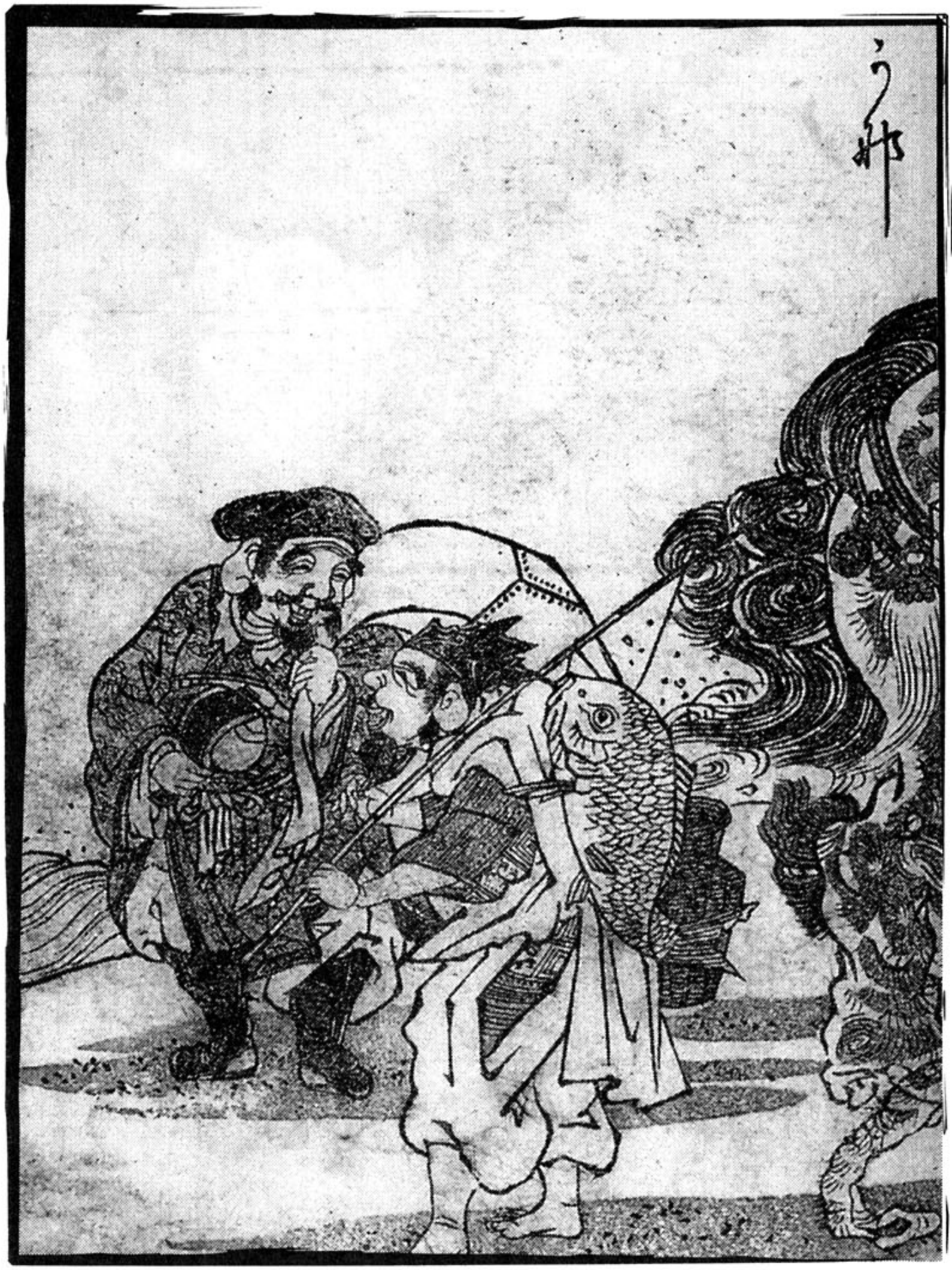
宝船（たからぶね）

みなめざめ



宝船（たからぶね）

波のり船のおとのよきかな



解説　妖怪絵師「鳥山石燕」の意図

多田克己

鳥山石燕（とりやませきえん）は姓を佐野、名を豊房といいます。正徳二年（一七一二）生まれの江戸の人で、天明八年（一七八八）八月三日に七十七歳で没しています。石燕は狩野玉燕（かのうぎょくえん）季信（あるいは狩野周信）に学んだ狩野派の画家です。狩野派とは室町時代後期の、狩野元信（もとのぶ）（または狩野正信（まさのぶ）の説もあり）を祖とする、幕府御用絵師を多く輩出した、日本の代表的な画派です。石燕は代々幕府の御坊主である家系に生まれ、経済的には恵まれたらしいことがわかっています。しかも石燕が絵師として作品を残すようになったのは、四十歳代以降で、「画図百鬼夜行」シリーズのような、主たる版本画は六十歳代以降と異例的に遅いものでした。彼の友人である大田南畝（おおたなんぽ）の随筆によれば、石燕は根津（現在の東京都文京区）に庵を編み、隠居仕事で絵を描いていたそうです。収入のために描いていたのではなく、自己表現の手段として絵画を嗜（たしな）んでいたらしいのです。現存している作品をしらべると、もっとも好んだ題材が妖怪でした。

妖怪を描くのにあたって、石燕がわざわざ狩野派を学んだのには理由があります。近世

になって石燕以外のさまざまな画家も妖怪画を残していますが、そうした妖怪画を始めた画家も狩野派の祖、狩野元信といわれています。しかも『百鬼夜行絵巻』を描いたといわれる土佐光信（土佐派の代表的存在で、宮廷の絵所預）は元信から狩野派の中国的な作風を学び、さらに元信と姻戚関係になったとされます。すなわち日本で最高の妖怪画を描くためには必須の条件であったと思われます。それほどまでして本格的な妖怪が描きたかったのでしょうか。

幕府御用絵師の多い狩野派は、縁起を祝うものやさまざまな故事を題材にしたものを要求されたことから、技術的な画力以上に日本、中国を問わず、さまざまな古典に精通していなければなりませんでした。その中でも石燕は、当時の江戸の文化人が一目を置くほどの博学者であったようです。それは「百鬼夜行」シリーズ『画図百鬼夜行』『今昔画図続百鬼』『今昔百鬼拾遺』『百器徒然袋』に書かれている添書にもにじみ出ています。その引用されたと思われる書籍は次のように大別できます。

① 日本の古典／伊勢物語、宇治拾遺物語、古今著聞集、今昔物語集、徒然草、枕草子など
② 和歌／古今和歌集、万葉集など
③ 軍記物語／源平盛衰記、曾我物語、太平記、平家物語など
④ 近世の怪談集／御伽百物語、怪談全書、奇異雑談集、諸国百物語、剪灯新話、曾呂利物語、太平百物語、百物語評判など

⑤ 浮世草子／好色一代男、西鶴諸国ばなし、金々先生栄花夢など
⑥ 仏教説話集／勧化一声電、輟耕録、発心集など
⑦ 中国の古典／三国志演義、周礼、小説、春秋左氏伝、神仙伝、山海経、荘子、捜神記、抱朴子、文選、酉陽雑俎、礼記、列仙伝、論語など
⑧ 本草書（漢方薬書）、博物学書／本草綱目、和漢三才図会など
⑨ その他／七十一番職人歌合、風姿花伝など

そのほかに随筆集から各地の伝説や民間伝承を取材してもいます。さらに石燕は能のテキストである、次のような謡曲からも引用しています。

葵上、安達原（黒塚）、大江山、翁、鉄輪、関羽、菊慈童、黒主、鞍馬天狗、鍾馗、猩猩、殺生石、高砂、土蜘蛛、道成寺、鵺、橋姫、芭蕉、鉢木、花筐、紅葉狩、頼豪、羅生門などですが、どの妖怪になんの謡曲が対応しているにはちょっとした教養が身につくと思います。『百器徒然袋』には四十八種の妖怪が紹介されていますが、それが全て能、浄瑠璃、歌舞伎のいずれかの芝居物語と結びついているらしいのです。

すると石燕の「百鬼夜行」シリーズとは、勉強しなければおもしろくないものなのでしょうか。その答は違うと思います。たとえば「百々目鬼」という妖怪は手長（盗みぐせのある人の意）な女で掏摸師だったため、鳥目（鳥の目のような孔のある意で銅銭の意）の

精が腕に付いて祟られたとありますが、これはお金を「御足」とも呼ぶことから、足が付いて手に罹る（犯罪事実の手がかりが見つけられて、いやな目にあう）という意味にひっかけた石燕の洒落でした。そんなひどい目に百回も遭った、弱り目に祟り目（困ったときにさらによくない事が重なる意）ならば、さっさと掏摸の「足を洗えばいい」というわけです。つまり百々目鬼とは妖怪でもなんでもない石燕の創作で、漫画的な表現だったのです。「百鬼夜行」シリーズには全部で二百数体ほどの妖怪が紹介されていますが、そのうち三分の一ほどが石燕によるお遊びです。読者もどれがそうなのか見つけ出してください。

石燕は戯作者である大田南畝と同じく、江戸の狂歌師で、他の狂歌師とも交流がありました。狂歌とはうわべは高尚な和歌や漢詩のふりをして、内容は諧謔（戯言）と滑稽を詠んだ短歌です。この狂歌を初めて絵画表現にとり入れたのは石燕の弟子である歌川豊春といわれますが、師匠である石燕がすでに自分の作品の中で表現していたらしいのです。

洒落好きの石燕は死んでもその身体で洒落を表現したようです。七十七歳で没して鬼籍に入った石燕は、浅草光明寺（東京都台東区元浅草四丁目）に葬られましたが、この場所は江戸城本丸から見て正確な鬼門（東北）の位置にあったのです。

（平成十七年六月）

索引

あ

青行燈（あおあんどう）……一五八
青鷺火（あおさぎのひ）……九〇
青女房（あおにょうぼう）……一〇六
青坊主（あおぼうず）……六一
赤舌（あかした）……六三
垢嘗（あかなめ）……二〇
鐙口（あぶみくち）……二一五
油赤子（あぶらあかご）……九四
天逆毎（あまのざこ）……一二七
雨女（あめおんな）……一五九
網剪（あみきり）……三三
雨降小僧（あめふりこぞう）……一〇四
あやかし……一六三

い

生霊（いきりょう）……四六
以津真天（いつまで）……二一
犬神（いぬがみ）……一六
否哉（いやや）……一八四

う

牛鬼（うしおに）……六四
丑時参（うしのときまいり）……八六
後神（うしろがみ）……一八三
姥が火（うばがひ）……三三
姑獲鳥（うぶめ）……三五
海座頭（うみざとう）……三六
うわん……六五

え

雲外鏡（うんがいきょう）……二三六
襟立衣（えりたてごろも）……二三五
煙々羅（えんえんら）……一五三

お

芋うに（おうまがとき）……六〇
逢魔時（おおかぶろ）……七二
大禿（おおくび）……一三三
大首（おおざとう）……一二四
大座頭（おおさかべ）……一六八
長壁（おさこうぶり）……八五
長冠（おしろいばば）……二〇〇
白粉婆……一四八

おとろし　五五
鬼（おに）　七四
鬼一口（おにひとくち）　一六四
朧車（おぼろぐるま）　一五五
陰摩羅鬼（おんもらき）　九七

か

骸骨（がいこつ）　一三
貝児（かいちご）　二八
隠里（かくれざと）　一八
影女（かげおんな）　一五〇
元興寺（がごぜ）　五九
火車（かしゃ）　三三
火前坊（かぜんぼう）　一五六
片輪車（かたわぐるま）　九五
河童（かっぱ）　一八
金霊（かねだま）　一二六
窮奇（かまいたち）　三三

髪鬼（かみおに）　二一九
瓶長（かめおさ）　二四五
川赤子（かわあかご）　一〇一
獺（かわうそ）　一九
岸涯小僧（がんぎこぞう）　一六一
加牟波理入道（がんばりにゅうどう）　一〇三

き

狐火（きつねび）　二四
鬼童（きどう）　一六三
絹狸（きぬたぬき）　二〇三
狂骨（きょうこつ）　一八一
経凛々（きょうりんりん）　二三六

く

沓頬（くつつら）　二〇一
鞍野郎（くらやろう）　二一四
黒塚（くろづか）　四一

け

毛羽毛現（けうけげん）　一七九
毛倡妓（けじょうろう）　一〇七
倩兮女（けらけらおんな）　一五一

こ

虎隠良（こいんりょう）　二一三
古庫裏婆（こくりばば）　一四七
小雨坊（こさめぼう）　一六〇
古戦場火（こせんじょうのひ）　八九
小袖の手（こそで）　一六六
木魅（こだま）　一〇
五徳猫（ごとくねこ）　二四三
琴古主（ことふるぬし）　二三三
古籠火（ころうか）　二〇四

さかばしら
逆柱 四三
さざえおに
栄螺鬼 二一〇
さとり
覚 七八
さら
皿かぞえ 九八
さんせい
山精 七五

し

じゃこつばば
蛇骨婆 一四九
じゃたい
蛇帯 一六五
じゃみ
邪魅 一一三
しゃみちょうろう
三味長老 一三四
しゅてんどうじ
酒顛童子 七九
しょうけら 五三
しょうごろう
鉦五郎 二〇八
しょくいん
燭陰 一三八
じょろうぐも
絡新婦 二七
しらちご
白児 一六
しらぬい
不知火 八

す

すいこ
水虎 四七
すずひこひめ
鈴彦姫 二〇六
すずり たましい
硯の魂 一三七

せ

せっしょうせき
殺生石 一七〇
せとだいしょう
瀬戸大将 二四一
ぜんふしょう
禅釜尚 二一三

そ

そうげんび
叢原火 二九

た

たいまつまる
松明丸 二一六
たかじょ
高女 三八
たからぶね
宝船 一九五
たからぶね
宝船 二四七
たからぶね
宝船 二四八
たきれいおう
滝霊王 一八六
たぬき
狸 二一
たまものまえ
玉藻前 八四

ち

ちょうちんび
提灯火 九一
ちょくぼろん
猪口暮露 二四〇
ちりづかかいおう
塵塚怪王 一九七

つ

つちぐも
土蜘蛛 一一七
つのはんぞう
角盥漱 二三〇
つるべび
釣瓶火 三〇

て

鉄鼠（てっそ）……四〇
手の目（てのめ）……三九
寺つつき（てらつつき）……八二
天狗（てんぐ）……二
天狗礫（てんぐつぶて）……一三
天井下（てんじょうくだり）……一三
天井嘗（てんじょうなめ）……二〇五

と

道成寺鐘（どうじょうじのかね）……一四
燈台鬼（とうだいき）……一四五
百々目鬼（どどめき）……一一九
泥田坊（どろたぼう）……一四六

な

鳴釜（なりがま）……二四三

に

入内雀（にゅうないすずめ）……八三
乳鉢坊（にゅうばちぼう）……三七
如意自在（にょいじざい）……三三九
人魚（にんぎょ）……一四〇
人面樹（にんめんじゅ）……一三九

ぬ

鵺（ぬえ）……一一〇
ぬっぺっぽう……六三
ぬらりひょん……五八
濡女（ぬれおんな）……五六

ね

猫また（ねこ）……一七

の

野槌（のづち）……一一六
野寺坊（のでらぼう）……三七
野衾（のぶすま）……一一五

は

墓の火（はかのひ）……九三
白沢（はくたく）……一八七
ばけの皮衣（ばけのかわごろも）……二〇三
橋姫（はしひめ）……八〇
芭蕉精（ばしょうのせい）……一七六
機尋（はたひろ）……一六七
箒神（ははきがみ）……三一
返魂香（はんごんこう）……一四一
般若（はんにゃ）……八一

ひ

火消婆（ひけしばば） 九三
魃（ひでりがみ） 七六
人魂（ひとだま） 九九
日の出（ひで） 一二八
比々（ひひ） 一一八
火間蟲入道（ひまむしにゅうどう） 一六九
ひょうすべ 五三
瓢箪小僧（ひょうたんこぞう） 一三七
屏風闚（びょうぶのぞき） 一七八
日和坊（ひより ぼう） 一〇五
琵琶牧々（びわぼくぼく） 一三三

ふ

風狸（ふうり） 一七一
文車妖妃（ふぐるまようひ） 一九八
袋貉（ふくろむじな） 一三一
舟幽霊（ふなゆうれい） 一〇〇
不々落々（ぶらぶら） 一二七

ふらり火（ふらりび） 三一
古空穂（ふるうつぼ） 一三八
古山茶の霊（ふるつばきのれい） 一〇三
震々（ぶるぶる） 一二〇

へ

幣六（へいろく） 一三五

ほ

彭侯（ほうこう） 一四三
方相氏（ほうそうし） 一八五
払子守（ほっすもり） 一〇九
骨女（ほねおんな） 一〇八
骨傘（ほねからかさ） 二〇七
暮露々々団（ぼろぼろとん） 一三〇

ま

反枕（まくらがえし） 一四四

み

見越（みこし） 五一
簑火（みのび） 一五七
蓑草鞋（みのわらじ） 一三三

む

無垢行騰（むくむかばき） 一三九
貉（むじな） 一一四

め

目競（めくらべ） 一八二
面霊気（めんれいき） 一三四

も

魍魎（もうりょう） 一一三
木魚達摩（もくぎょだるま） 一三八
目目連（もくもくれん） 一八〇

や

紅葉狩（もみじがり）……一五四
百々爺（もも じい）……一三五
茂林寺釜（もりんじのかま）……一七三
鳴屋（やなり）……三四
山姥（やまうば）……一五
山風（やまおろし）……二四四
幽谷響（やまびこ）……一三
山童（やまわらわ）……一四
鎗毛長（やりけちょう）……二一三

ゆ

幽霊（ゆうれい）……四八
雪女（ゆきおんな）……四五

よ

夜啼石（よなきのいし）……一七五

ら

羅城門鬼（らじょうもんのおに）……一七四

ろ

飛頭蛮（ろくろくび）……四二

わ

わいら……五四
輪入道（わにゅうどう）……九六

図版クレジット

■画図百鬼夜行

所蔵：川崎市市民ミュージアム
撮影：奥西淳二

■今昔画図続百鬼

所蔵：東北大学附属図書館

■今昔百鬼拾遺

（雲・雨）
所蔵：川崎市市民ミュージアム
撮影：奥西淳二
（霧）
所蔵：日比野聖巳
撮影：ツートップ／鴨下誠

■百器徒然袋

所蔵：川崎市市民ミュージアム
撮影：奥西淳二

鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集

鳥山石燕

角川文庫 13881

平成十七年七月二十五日　初版発行
平成十九年二月二十日　九版発行

発行者—井上伸一郎
発行所—株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話・編集　(〇三)三二三八—八五五五
〒一〇二—八〇七八
発売元—株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話・営業　(〇三)三二三八—八五二一
〒一〇二—八一七七
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所—旭印刷　製本所—BBC
装幀者—杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

角川ソフィア文庫 319　ISBN4-04-405101-1　C0195

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

KWAI 怪

大いに怪を語る。



対談集 妖怪大談義 京極夏彦

各界の「怪しいもの」には一家言ある」御仁たち15人と語りに語った、京極夏彦初の対談集！

水木しげる
養老孟司
中沢新一
夢枕獏
アダム・カバット
宮部みゆき
山田野理夫
大塚英志
手塚眞
高田衛
保阪正康
唐沢なをき
小松和彦
西山克
荒俣宏

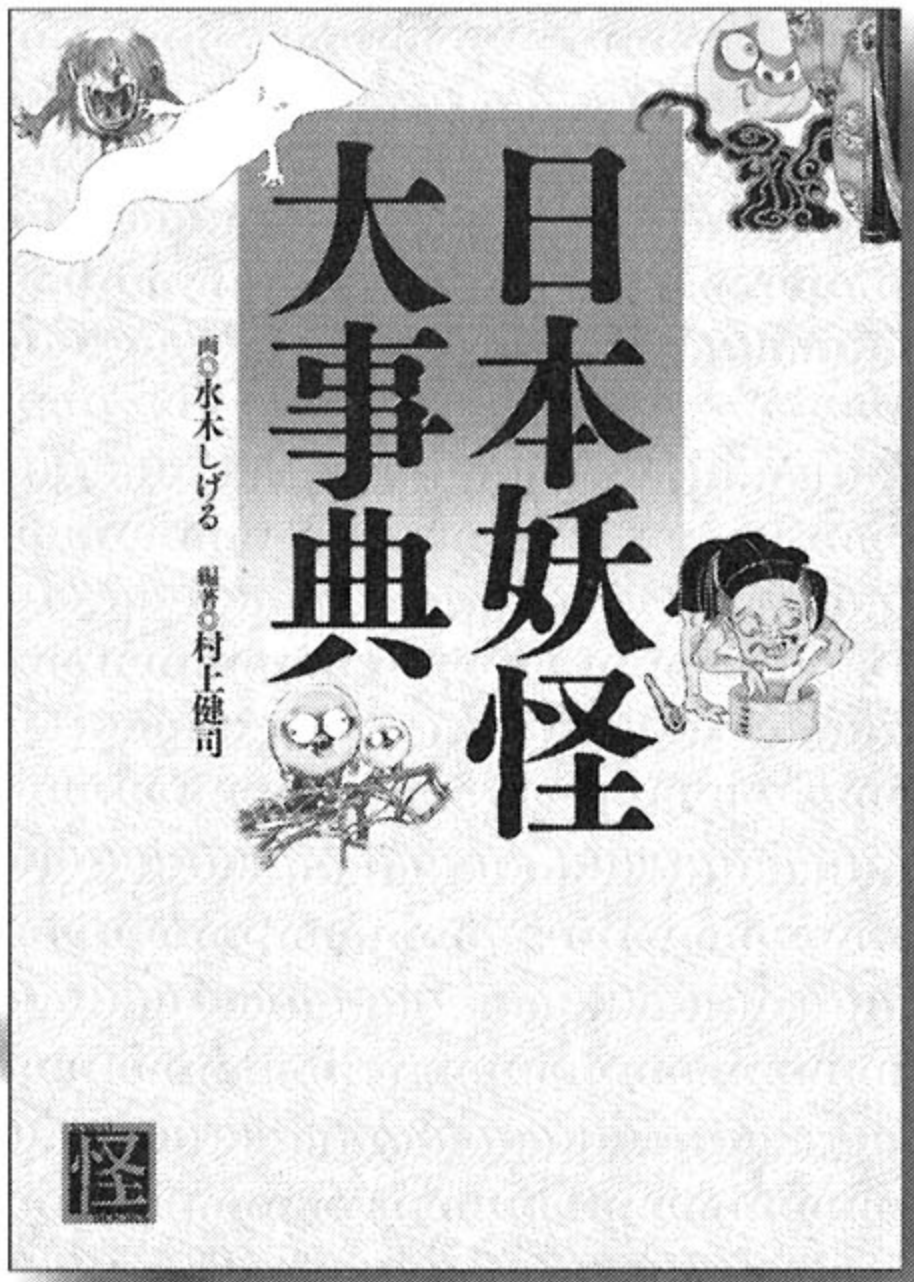
四六判上製◆角川書店

KWAI 怪

妖怪を知らずして、
日本の伝統文化は語れない!!

日本妖怪大事典

水木しげる　画
村上健司　編著



古から現代まで、全国津々浦々に跳梁跋扈(いにしえ)し語り継がれてきた妖怪たちが、この一冊でわかる“妖怪事典の決定版”。

角川書店　A5判並製

小松和彦の本

古来、未知のものに対する恐れを異界の物語に託してきた日本人。時間の流れが歪む向こう側の世界で繰り広げられた酒呑童子、浦嶋太郎、七夕の伝説や義経の「虎の巻」など数多の物語を絵巻から読み解き、日本人の隠された精神生活にせまる、画期的異界論。



絵物語の想像力

異界と日本人

小松和彦

異界を覗くと、日本人の想像力が見える。

妖怪研究の第一人者が贈る画期的異界論。

角川選書 356

■角川選書



神隠し……それは人を隠し、神を現わし、人間界の現実を隠し、異界を顕わすヴェール。これは人を社会的な死、即ち「生」と「死」の間に置く装置であった。だからこそ「神隠し」という語には甘く柔らかい響きがただよう…。異界研究の第一人者が「神隠し」をめぐるフォークロアを探訪し、日本人の異界コスモロジーを解明する。

■角川文庫

猫楠
neko gusu

――南方熊楠の生涯――

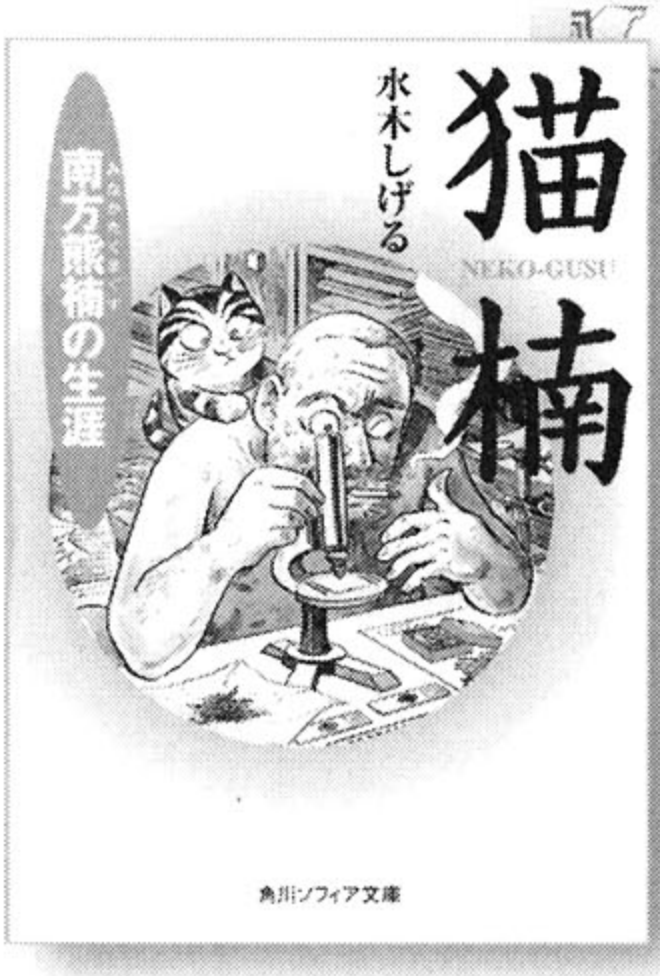
水木しげる



国際化とは程遠い明治中期の日本…。
単身渡英し『ネイチャー』誌に寄稿、
大英博物館嘱託員になるなど、
八面六臂の大活躍。



帰国後は民俗学、粘菌学
研究の傍ら神社合祀令反対や
熊野の森の保護運動など時代の
先をいく活動が世間を驚かせた。

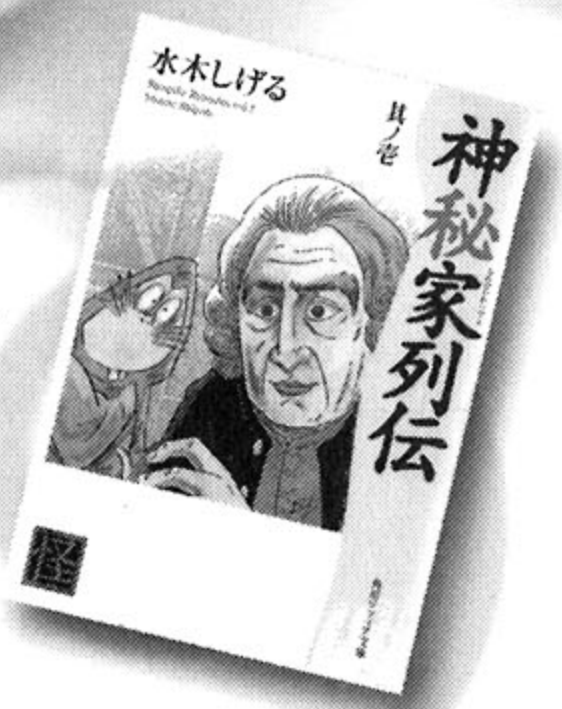


そんな日本史上最も
バイタリティ溢れた大怪人の
半生を、妖怪博士水木しげるが
独特のペーソスを交えて
描く意欲作！

角川ソフィア文庫

神秘家列伝

角川ソフィア文庫



❖其ノ壱収録作品❖

科学に飽き足らず、霊魂の探究に生涯を捧げたスウェーデンボルグ。苦行に耐え、瞑想によってすべてを超越した大呪術師、ミラレパ。ヴードゥーの神官にして奴隷解放運動の偉大なる指導者、マカンダル。修行のため自らの耳を削ぎ、神秘体験を『夢記』に記した霊能者、明恵。



❖其ノ弐収録作品❖

中世に活躍した陰陽師の第一人者、安倍晴明。明治時代、数々の不思議現象を起こした神女、長南年恵。シャーロック・ホームズの作者にして実は熱心な心霊主義者、コナン・ドイル。多くの執筆活動で度々投獄されながらも時の不条理に戦いを挑んだ宮武外骨。

❖其ノ参収録作品❖

明治から昭和にかけ、神界と交信しつつ世の大本を説いた出口王仁三郎。神通力を発揮し庶民のために尽力した修験道の開祖、役小角。迷信否定のため各地を廻り奇談を拾集した東洋大学の創始者、井上円了。国学者であり神道、幽界への造詣も深かった平田篤胤。

❖其ノ四収録作品❖

福の神と呼ばれ人々に愛された男、仙台四郎。平田篤胤も研究した特殊能力の持ち主、天狗小僧寅吉。多芸多才でその名を轟かせた大人物、駿府の安鶴。民俗学の第一人者、柳田国男。恐がりなのに怪奇小説作家となった泉鏡花。



KWAI 怪



水木版 妖怪大戦争

原案 水木しげる
荒俣宏

麒麟送子となったタダシは、世界の平和を守るため、聖剣を手に妖怪たちと協力して悪に立ち向かう！妖怪研究の第一人者、水木しげるが独自の味付けでマンガ化！小説とも映画とも一味違う「妖怪大戦争」!!



大好評発売中

KWAI 怪

妖怪大戦争

荒俣宏



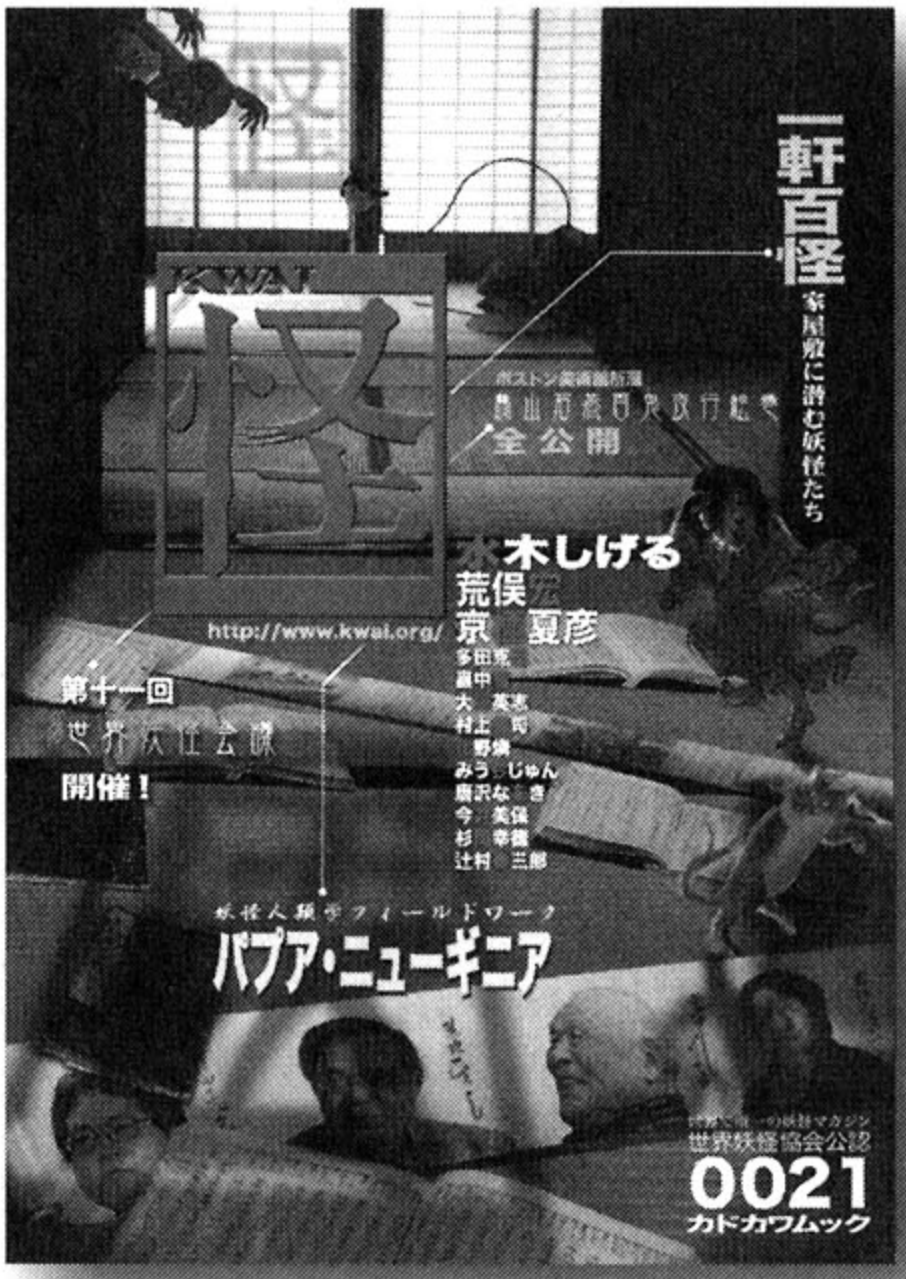
◆角川文庫

「麒麟送子に選ばれし子供は、守り神の大天狗より伝説の剣を授かり、世界平和を守る正義の味方となる――」田舎に越してきたタダシは、なぜかこの大役に選ばれ、天狗の山で不思議な妖怪スネコスリと友達になる。同じ頃、日本各地で不可解な事件が勃発。化け物が人間を襲い、妖怪までもが窮地に追い込まれていた。タダシとともに悪と戦う決意をした妖怪たち。タダシは悪霊の魔手から世界を守り真の麒麟送子となれるのか？愛と平和の一大冒険ファンタジー！

大好評
映画の
原作本

KWAI 怪

“見えない世界”を描きだす世界で唯一の妖怪マガジン



水木しげる、荒俣宏、京極夏彦ほか妖怪感度200%の豪華執筆陣による妖怪雑誌。

世界妖怪協会公認

「怪」好評発売中！

妖怪情報満載のインターネットサイトhttp://www.kwai.org/